

は、下接語を中心にみた用法を示す。用例文の下の（ ）内には、正法眼蔵の略巻名、用例文の所在を示す。七23ウ3は乾坤院本第七冊23丁裏3行目のこと、上2081は岩波文庫本上巻208頁1行目のことを示す。

注2 拙稿「正法眼蔵の表記法——道元・懷辨筆本における——」(『東海学園国語国文』2号、昭和46・3)参照。

注3 拙稿「正法眼蔵の語法——漢語サ変動詞について——」(『名古屋大学国語国文学』26号、昭45・7)参照。

疎動シ性ハ恬静ナリト道取スルハ外道ノ見ナリ(説心 九12ウ1
・中2105)

乾坤院本「疎動」、「疎」は「疎」の譌字、「疎」は「疏」と同じ
で、この場合「あらく」「大きく」ほどの意。

(822) 祖道ス (1例・自) 未1 (ズ)

。仏国ニアラハ仏説スヘシ、仏不説ナリ、シリヌ、仏国ノ調度ニア
ラス、祖道セス、シリヌ、祖域ノ家具ニアラストイフコトヲ(仏
道 九42ウ9・中22910)

「祖」は「道」の主語、「祖、道セス」とも解されるが、「仏説ス」
などと同様に考へておく。

(823) 塞却ス (1例・他) 未1 (ラル)

。眼睛ニ照穿セラレテ不聞ナリ、身心ニ塞却セラレテ不聞ナリ(仏
向 五35ウ10・上4143)

「ふざぐ」意。「却」は接尾辞。

(824) 損壊ス (1例・他) 体1 (ノミ)

。コレタ、人天ノ種子ヲ損壊スルノミニアラス(発善 十三9オ1

・中39912)

(825) 躡居ス (1例・自) 用1 (中止)

。ツキニ袴ノ口角ヲオサメテ門ニムカイテ兩足ニ槽唇ノ両辺ヲフミ

テ躡居シ届ス(洗淨 十一25オ2・上1134)

(826) 存取ス (2例・自) 未1 (リ) 止1 (ベシ)

(未然形の例) リ下接例

。即聞ノトキ語話サリテ一辺ノ那裏ニ存取セルニアラス(仏向 五
36ウ6・上41415)

「取」は接尾辞。

(827) 尊重ス (6例・他ヲ) 未1 (シ) 止3 (断止1 ベシ2)

体2 (ナリ1 ガ格1)

(未然形の例) シ下接例

。真丹第二祖大祖正宗普覚大師ハ神鬼共ニ嚮慕ス、道俗同ク尊重セ
シ高徳ノ師ナリ(行持下 四11オ8・中508)

(828) 尊崇ス (1例・他) 用1 (中止)

。釈迦牟尼仏ヲ恋慕シタテマツランハコノ面授正伝ヲオモクシ尊崇
シ難値難遇ノ敬重礼拝スヘシ(面授 十一5オ9・中3152 尊崇
シ)

。本山版「尊崇」である。正法寺本、玉雲寺本(長円寺本も)、瑠璃
光寺本いづれも「尊崇」である。

(829) 存没ス (1例・自) 体1 (ガ)

。タトヒシカアリトモ靈知ノユトクニ常住ナラス、存没スルカユヘ
ニ(即心 一39オ8・上1025)

「存したり没したりする」つまり「あつたりなかつたりする」意で
ある。

注1 掲載の仕方は、前稿と同じである。すなはち、(762)は漢字二字のサ変動
詞の五十音順の番号。(1例・自)は、用例数1例・自動詞の意。止1(断
止)は、終止形の例が1例で、その用法が「断止」である意。()内に

セリ(葛藤 八23オ5・中1894)

「祖としての様子を現する」意。「儀」に「むかふ」「くる」の意があるが、「祖儀」||「祖としての儀(ありかた)」といふ名詞をサ変動詞化したものとみておく。(774)の「相好ス」の場合と同じである。

(813) 即位ス (3例・自) 未1 (ズ) 止1 (断止) 体1 (ニ接)

(未然・連体形の例)ズ・ニ接下接例

。武宗即位スルニ宣宗イマタ即位セスシテオイノクニ、アリ (行持 上 三58オ3・中368)

(814) 即解ス (1例・自) 体1 (ナリ)

。十千ノ遊魚ハ智シタシク身ニテアルユエニ縁ニアラス因ニアラス
トイエトモ聞法スレハ即解スルナリ (愆慶 四34ウ6・上4298)
この「即」は「すぐに」の意。

(815) 側耳ス (1例・他) 未1 (ズ)

。従来ノ一枚二枚ノ臭皮袋ヲ勘過スルニ疑着ニオヨハス、親覲ニオ
ヨハス、タ、隣談ニ側耳セスシテ不管ナルカコトシ (画餅 五20
オ7・中14810)

「耳をそばだる」意。又、この一語としても、他に対する行動であつて、他動詞と考へられる。

(816) 触折ス (1例・自) 体1 (連体法)

。ヒサシク龍潭ニトフラヒセハ頭角触折スルコトモアラマシ (心不
二24ウ7・上2676)

(817) 即得ス (1例・他ヲ) 体1 (ナリ)

。菩薩道トイフハ吾亦如是汝亦如是ナリ、如許多ノ蔓枝行李ヲ即得
スルナリ (見仏 十二4ウ1・中34515)

この「即」は「すぐに」の意。

(818) 塞破ス (1例・自) 未1 (リ)

。ソノ様ハ鼻様ナリ、シカアレトモ結夏ノユヘニキタル、虚空
塞破セリ、アマレル十方アラス (安居 十五5ウ6・下7711)
「ふさがつてしまふ」ことをいふ。

(819) 即縛ス (1例・他) 未1 (ラル)

。仏縛トイフハ菩提ヲ菩提ト知見解会スル即知見即解会ニ即縛セ
ラレヌルナリ (行仏 二2ウ2・上34511)

「即知見」「即解会」の「即」と関連して用ゐられてゐる。この
「即」は、「まさにその」「ほかならぬその」の意。「即縛ス」の
場合、「即縛」といふ名詞形をつくつた上で、サ変動詞化したと考
へるべきであらう。

(820) 触礼ス (1例・自) 止1 (断止)

。ツキニ住持人於首座触礼三拜、イハク住持人タ、クラキニヨリテ
タチ面南西ニテ触礼ス (安居 十五17オ10・下902)

前に出て来てゐる「触礼三拜」の意である。但し、「触礼三拜」に
ついては説がわかる。

(821) 踈動ス (1例・自) 用1 (中止)

。性ハ説ナル(↑リ)コトヲ信受スル、コレ嫡孫ノ仏祖ナリ、心ハ

。密語ノ密人ニ相逢スル、仏眼也覩不見ナリ（密語 九50オ2・中25110）

「相逢スルコトハ」と補へば意味は通ずる。但し、これも連体形の一用法と認むべきである。

(806) 相瞞ス（1例・他） 止1（ベシ）

。イマ波斯匿王ノ問取スル宗旨ハ、尊者ステニ見仏ナリヤト問取スルナリ、尊者アキラカニ眉毛ヲ策起セリ、見仏ノ證驗ナリ、相瞞スヘカラス（見仏 十二9ウ6・中3526）

この「相」は日本語「あひ」に通ずる。「あひ」とよみたくなるやうなものであるが、やはりソウマンスであらう。

(807) 相聞ス（1例・他） 未1（ラル）

或從經卷ノトキ、自己ノ皮肉骨髓ヲ參究シ、自己ノ皮肉骨髓ヲ脱落スルトキ桃花眼睛ツカラ突出來相見セラル、竹声耳根ツカラ霹靂相聞セラル（自證 十四18オ10・下442）

(808) 澡浴ス（12例・他ヲ） 未1（ズ） 用5（中止4 テ1） 止3（断止2 ベシ1） 体3（連体法2 ニ接1）

（連体形の例）ニ接下接例

。タトヒ四大ナリトモタトヒ五蘊ナリトモタトヒ不壞ナリトモ澡浴スルニミナ清淨ナルコトヲウルナリ（洗面十35ウ5・中29615）

12例とも洗面卷に用ゐられてゐる。

(809) 想料ス（1例・他） ク語法1

。シカアレトモ想料（↑断）スラクハ玄沙オロカニ転法輪ハ説法輪

ナラント会取セルカ、モシ、カアラハナヲ雪峰ノ道ニクラシ（行仏 二13ウ6・上35811）

乾坤院本「想断」であるが、「想料」（おもひはかる）である。ただし、正法寺本は欠本であるが龍門寺本も「想断」とある。乾本の親本にかうあつたのであらう。他の古写本、洞雲寺本、瑠璃光寺本（以上六十巻本）、玉雲寺本、長円寺本（以上梵清本系）においては、いづれも「想料」である。

(810) 草料ス（1例・他ヲ） 用1（テ）

。シカアレハスナハチ曹谿ノ頭正尾正ヲ草料シテ古仏ハカクノコトクノ巴鼻ナルコトヲシルヘキナリ（古仏 二27オ2・中1784）

「草料」は「まぐさ」のことであるが、右の例は、これでは通じない。この「料」は、前項の「想料」の「料」と同様「ハカル」ことで、「草」はわかりにくいだが、「想料」と同じやうな意を表はすものとみておく。

(811) 相論ス（1例・他） 体1（ニ接）

。第三十三祖大鑿禪師未剃髮ノトキ、広州法性寺ニ宿スルニ、二僧アリテ相論スルニ一僧イハク、幡ノ動スルナリ、一僧云風ノ動スルナリ（恁麼 四33オ9・上42714）

この「相」は「互に」の意で明瞭である。

(812) 祖儀ス（1例・自） 用1（テ）

。嫡々正證二十八世、菩提達磨尊者ニイタル、尊者ミツカラ震旦国ニ祖儀シテ正法眼蔵無上菩提ヲ大祖正宗普覺大師ニ附囑シニ祖ト

(未然形の例) ズ下接例

。シカアレトモ丈六金身ニ説似セス、即公案アリ、見成ヲ相待セス
敗壞ヲ廻避セス(即心 一40ウ8・上1042)

(797) 相談ス (1例・他ト) 未1 (ム)

。啞語キクヘシ、啞ニアラスハイカテカ啞ト相見セン、イカテ啞ト
相談セン(道得 七33オ9・中1423)

(798) 掃地ス (1例・自) 用1 (中止)

。第幾月ヲ拳シテ掃地シ正是第二月ヲ拳シテ掃地掃床スルユヘニ尽
大地ノ恁麼ナリ(分法 十二26ウ2・下1711)

(799) 増長ス (2例・自) 体2 (連体法1 ナリ2)

連体法

。胡乱後三十年、不曾闕塩醋ナリ、タトヘハ増長スルユヘニ已生ス
ルナリ(分法 十二30オ10・下225)

(800) 相伝ス (17例・他ヲ・ト) 未7 (ズ3 リ3 バ1) 用3

(中止1 動詞2) 止4 (断止3 ト1) 体3 (連体法2
ナリ1)

(未然形の例) バ下接例

。仏法モシ偏正ノ商量ヨリ相伝セハイカテカ今日ニイタラン(春秋
八19ウ2・中3829)

(連用形の例) 動詞下接例

。ソノ心術ハ仏々相伝シキタレルモノナリ(谿声 五30ウ1・上141
6)

下接動詞はいづれもキタルである。

(801) 造塔ス (1例・自) 体1 (ナリ)

。心々ヲ拈シテ造仏スルナリ、塔々ヲカサネテ造塔スルナリ(発菩
十三10オ1・中40015)

前の「造経ス」と同様の造語である。

(802) 走入ス (1例・自) 体1 (連体法)

。而今脚尖ニ行履スル発(↑廢)心発足ヨリコノカタ弁道功夫オヨ
ヒ證契究徹ミナ見仏裏ニ走入スル活眼睛ナリ(見仏 十二2ウ1
・中3430)

(803) 相符ス (1例・自) 体1 (ナリ)

。コレミナ画図ナルカユエニ長短ノ図カナラス相符スルナリ(画餅
五23ウ1・中1525)

「符」は「符合する」意。

(804) 造仏ス (3例・自) 用1 (中止) 体2 (ナリ)

(連用形の例) 中止法

。菩提心ヲ拈来スルトイフハ一茎草ヲ拈シテ造仏シ無根樹ヲ拈シテ
造経スルナリ(発菩 十三7ウ8・中3985)

右例文中に見られる「造経ス」と同様の造語である。

(805) 相逢ス (13例・他ニ) 未3 (ズ2 ム1) 用1 (動詞) 止4

(断止1 ト1 ベシ2) 体5 (連体法1 ナリ2 ハ1 中止
1) (連体形の例) 中止形

ソウシヨウとよむ。

(787) 相證ス (2例・他ヲ) 用1 (中止) 止1 (断止)

。神頭ノ披毛セルヲ相證シ鬼面ノ戴角セルヲ相修 (↑形) ス (自證
十四17ウ10・下439)

。本山版では下の「相修ス」も「相證ス」としてゐる。

(790) 相承ス (5例・他ヲ) 未4 (ズ1 リ3) 用1 (テ)

(未然形の例) ズ下接例

。愚者オモハク尊者カリニ化身ヲ現セルヲ円 (↑日) 月相トイフト
オモウハ仏道ヲ相承セサル党類ノ邪念ナリ (仏性 一19ウ6・上

32711)

この「相」も「相伝」等の「相」と同じである。「あひついで承ける」意。

(791) 蔵身ス (7例・自) 未2 (リ) 用2 (中止1 テ1) 止2

(断止1 ト1) 体1 (ナリ)

(未然・連用・終止形の例) リ下接・中止法・断止例

。如来ハ眼睛ニ蔵身シ、眼睛ハ梅花ニ蔵身ス、梅花ハ荆棘ニ蔵身セ
リ (優曇 十三16オ10・中39515) 3961)

。「身を蔵す」意。一語としては自動詞となる。

(792) 澡雪ス (1例・自) 用1 (中止)

。ソノナカニ僧堂コトニヤフレ雪散 満牀居不違処ナリ、雪頂ノ者
宿ナホ澡雪シ厖眉ノ尊年皺眉ノウレエアルカコトシ (行持上 三

49オ8・中2614)

「澡雪」で「あらひすすぐ」意であるが、ここでは、この「雪」に
「すすぐ」意のほか「ゆき」の意をふくませてゐる。また、「雪
頂」(雪を頂いた――髪が白くなった)の「雪」とも関連させてあ
る。

(793) 草創ス (4例・他ヲ) 未2 (ズ1 ム1) 用1 (中止) 止1

(断止)

(未然形の例) ム下接例

。モシ道場ヲ建立シ寺院ヲ草創センニハ仏祖正伝ノ法儀ニヨルヘシ
(洗浄 十一28ウ8・上11714)

(794) 奏対ス (1例・他) 止1 (断止)

。憲宗皇帝宣問ス、群臣ミナ賀表ヲタテマツル、卿ナンソ賀表セサ
ル文公奏対ス、微臣カツテ仏書ヲミルニイハク、仏光ハ青黄赤白
ニアラス、イマノハユレ竜神衛護ノ光明ナリ (光明 三35ウ1・
中11510)

(795) 相對ス (5例・自) 未1 (シム) 用1 (テ) 体3 (準体言

的用法単独1 ナリ2)

(連体形の例) ナリ下接例

。滅ヲ初中後ニ相待スルニアラス、相對スルニアラス (海印 三20
オ1・中748)

。「あひ対する」意。「相待」は「あひ期待する」意。

(796) 相待ス (8例・他ヲ) 未4 (ズ1 リ1 ラル2) 止1 (ベ

シ) 体3 (準体言的用法単独1 ナリ2)

(一類 二18ウ3・上916)

未然形の例、いづれも「リ」が下接してゐる点、この語の意味内容と関連して注意される。

(781) 送食ス (2例・自) 止2 (断止)

。雲居山弘覚大師ソノカミ三峰庵ニ住セシトキ天厨送食ス (行持上 三44ウ3・中217)

もう一例も同じく「天厨送食ス」である。「食を送る」意。「送食ス」一語としては自動詞と考へられる。

(782) 喪失ス (1例・他ヲ) 未1 (シム)

。踏躰ノトキノ風水、タトヒ身命ヲ喪失セシメストイフトモ、真父ノ宝財ナケスツヘキニアラス (行持上 三40ウ4・中1615)

(783) 宗取ス (1例・他) 体1 (ヲ)

。仏法ハカクノコトク弁取シ説取シ宗取スルヲ道理トセリ (諸悪 七11オ1・上15610)

「むねとする」意である。「取」は「弁取」「説取」の「取」と同じく接尾語である。なほ「説取シ」3字、正法寺本・竜門寺本にもない。

(784) 相授ス (1例・他) 用1 (テ)

。即今ノ道現成ハ諸仏相授シテ釈迦牟尼ニイタリ、諸祖正伝シテ馬祖ニイタレリ (法性 十26オ2・中2834)

諸仏の仏法授受のありさまを「相授ス」といつたものであるが、この「相」は「互に」の意ではなく「相継」「相伝」などの「相」と

同じで「あひついで」の意である。

(785) 相修ス (1例・他ヲ) 止1 (断止)

。アルイハ半身ヲ相見ス、アルイハ全身ヲ相見ス、半自ヲ相見スルコトアリ、半他ヲ相見スルコトアリ、神頭ノ披毛セルヲ相證シ鬼面ノ戴角セルヲ相修 (↑形) ス (自證 十四17ウ10・下439相證ス)

正法寺本・瑠璃光寺本等によつて「相修ス」とした。「形」は「修」の誤字と考へられる。「相證ス」と対になる。「相」は「相授」あるいは「相見」の場合と同じである。思想大系本注で「冗辞」としてゐる。この考へはとらない。「修證」といふ語を分割し、さらに前文の「相見ス」と関連させて用ゐてゐる。

(786) 崇重ス (3例・他ヲ) 未1 (ズ) 止2 (断止1 ベシ1)

(未然形の例) ズ下接例
。諸仏ノ正法ニクラキタクヒハ袈裟ヲ崇重セサル也 (伝衣 七14オ10・上19713)

(787) 掃除ス (1例・他ヲ) 用1 (テ)

。覚和尚ノ住裏ニ道士觀尼寺教院等ヲ掃除シテイマノ景德寺トナセリ (行持上 三51ウ2・中296)

この「掃除ス」の使用法は面白い。

(788) 相接ス (1例・他) 止1 (断止)

。カレワレヲミルニ新条ノ特地ニ相接ス (礼拝 六14オ1・上12411)

この「相好ス」は本来の動詞ではない。右例文中の「滅度ス」「成道ス」と対に用ゐられてゐる。本来は名詞であるが、「相好を相好たらしめる」意として用ゐる。かういふ使ひ方が眼蔵にはかなりみられる。七十五巻本中にはないが、「宝塔は虚空に宝塔し、虚空は宝塔を虚空す」(法華 上26914)の「宝塔ス」「虚空ス」はその一典型である。^(注3)

(775) 造作ス (6例・他ヲ) 未1 (ズ) 用3 (中止1 テ1 動詞

1) 体2 (カ終 ナリ1)

(連用形の例) 動詞下接例

。ユノ禅定見仏深入等ノ道理サキヨリ閑工夫漢アリテ造作シオキテイマノ漢ニ伝受スルニアラス (見仏 十二5オ8・中3471)

(776) 掃灑ス (5例・他ヲ) 用1 (中止) 止1 (断止) 体3 (連体

法1 ト2)

(連体形の例) 連体法

。黄蘗ノムカシハ捨衆シテ大安精舎ノ労侶ニ混迹シテ殿堂ヲ掃灑スル行持アリ (行持上 三57ウ1・中3513)

ソウサイとよむ。

(777) 蔵山ス (1例・自) 体1 (連体法)

。空ニカクル、山アリ、山ニカクル、山アリ、蔵ニ蔵山スル参学アリ (山水 六25オ4・上22814)

「蔵」は「かくす」意。

(778) 相嗣ス (19例・他ヲ) 未2 (リ) 用9 (中止7 テ2)

止1 (断止) 体7 (連体法3 ガ格2 ハ1 ト1)
(未然形の例) リ下接例

。西天ヨリ嫡々相嗣セラハナンソ同異アランヤ (嗣書 八34ウ1 乾本スルハ・上24112)

道元禅師真筆本では「せらは」、香積寺本 (現存道元禅師真筆本) 里見本とは別の真筆本の写し) も「せらは」である。乾坤院本は「スルハ」正法寺本「セルハ」、玉雲寺本・長円寺本は「セラハ」である。他に、古写本としては、竜門寺本と秘密正法眼蔵が「セラレハ」とあり、意味が異なる。江戸時代の本には、更に「せられいには」(問厚本) といったものもある。この部分いろいろあるが「セラバ」とするものと「セルハ」とするものに大きく分かれる。乾坤院本のみ「スルハ」であるが、恐らく「セルハ」の系統であらう。「セラレハ」「セラレイニハ」は、この「ラ」についての無理解があると考へられる。

なほ「相嗣ス」19例中、17例が嗣書卷にある。

(779) 相資ス (1例・他) 体1 (連体法)

。カノトキノ正信ヒソカニ相資スルコトアラハ心願ムナシカルヘカラス (伝衣 七27ウ1・上2145に相当、異文)

シヨウシともよめる。「資」は「たすける」意。

(780) 相似ス (11例・自) 未10 (リ) 体1 (連体法)

(未然形の例) リ下接例

。ユノ道取ハタトヒ僧ノ弄業識ニ相似セリトモ大用現は大軌則ナリ

ニマウケテ施主マサニ入堂セントスルトキ、メシニヨリテ施主ニ
ワタス(看経 六32ウ5・上3106)
ソウキヨウとよむ。「香を用意する」意。「装香ス」一語全体とし
ては自動詞である。

(768) 造経ス (1例・自) 体1 (ナリ)

。菩提心ヲ拈来スルトイフハ一茎草ヲ拈シテ造仏シ、無根樹ヲ拈シ
テ造経スルナリ(発善 十三7ウ8・中3985)

右の例文中の「造仏シ」と同様の造語である、他に「造塔ス」「造
像起塔ス」「造仏造塔ス」「造塔造仏ス」「造仏起塔ス」「造塔造
像ス」等の語が同一巻においてサ変動詞化して用ゐられてゐる。

(769) 相礙ス (2例・自) 未2 (ズ)

。物々ノ相礙セサルハ時々ノ相礙セサルカコトシ(有時 四63ウ5・
6・上15913)

この場合の「相」などは「あひ」とよみたくなるものであるが、や
はりソウとしておくべきであらう。

(770) 崇敬ス (1例・他ヲ) 体1 (連体法)

。仏道ヲ正伝セサラン祖師タレカ祖師トイハン、初祖ヲ崇敬スルコ
トハ第二十八祖ナルユヘナリ(仏経 十20オ8・中2637)

(771) 相継ス (2例・他) 体2 (連体法1 ナリ1)

。古仏イハク相継得成仏転次而授記、イハクノ成仏カナラス相継ス
ルナリ、相継スル少許ヲ成仏スルナリ(授記 五6ウ9・中84

11)

この「相継ス」は、右掲例文にみられるやうに、引用文によるもの
である。この引用文を訓読するとすれば「相継ぎて成仏を得、…」
とよむのがふつうであるが、かういつた引用文中の語を、眼蔵にお
いては、右のごとく、漢語サ変動詞化する例が目立つ。そして、そ
のよみ方も、右の語では「ソウケイ」とよむより仕方がない。また
この用法については、右のやうに訓読すれば、自動詞と考へるべき
ものであるが、サ変化した眼蔵のこの用例では、他動詞と考へざ
るを得ない。

(772) 曾見ス (1例・他ヲ) 止1 (断止)

。カヘリテ塩官ニ拳似スルニ、塩官イハク、ソノカミ江西ニアリシ
トキ一僧ヲ曾見ス(行持上 三48オ4・中259)

「曾て見た」意で、「曾」は本来副詞的に「見」を修飾するのであ
るが、右では「曾見ス」で一語になつてゐる。

(773) 漱口ス (3例・自) 用3 (中止1 テ2)

中止法

。右手ニ水ヲウケテクチニイレテ漱口シ刮舌ス(洗面 十45オ2・
中3076)

「口を漱ぐ」を一語としてゐる。一語としては自動詞である。

(774) 相好ス (1例・他ヲ) 止1 (ベシ)

。如許多ノ減度ヲ減度スヘシ、如許多ノ成道ヲ成道スヘシ、如許多
ノ相好ヲ相好スヘシ、ユレスナハチ相継得成仏ナリ、相継得減度

等ナリ…(授記 五7オ9・中854)

正法眼蔵のサ変動詞

—— その用例(九) (漢字二字ソ) ——

田 島 毓 堂

今回は、漢字二字のサ変動詞のうち、ソの部分の用例を掲示し、
考察する。^(注1)

(762) 相違ス (1例・自) 止1 (断止)

。モシカクノコトクナラハ、仏道ニ相違ス (伝衣 七23ウ3・上208
1)

この「相」はソウとよむべきものである。漢字「相」に「互に」
「共に」「彼れもこれも」等の意があり、日本語「あひ」に応ず
る。「相」を「あひ」とよむか、ソウとよむか、一般には紛はしい
ものもあるが、眼蔵の表記においては、「相」といふ漢字表記では
「ソウ」とよむべきである。^(注2)

(763) 相応ス (7例・自) 未1 (リ)

。イマノ人ハ実ヲモトムルコトマレナルニヨリテ、身ニ行ナクコ、
ロニサトリナクトモ、他人ノホムルコトアリテ行解相応セリトイ
ハム人ヲモトムルカコトシ (谿声 五30オ8・上1414)

(764) 想憶ス (1例・他) 止1 (断止)

。想憶ス、ユレスナハチ無繩自縛ナリ (行仏 二2ウ5・上34513)

倒置されてゐる。

(965) 相契ス (1例・自) 未1 (ズ)

。二祖シキリニ説心説性スルニ、ハシメハ相契セス、ヤウヤク積功
累徳シテツキニ初祖ノ道ヲ得道シキ (説心 九10オ5・中20714)
ソウカイとよむ。「契合する」意である。

(466) 相観ス (1例・他) 体1 (ナリ)

。時節ノ因縁ヲ観スルニハ時節ノ因縁ヲモテ観スルナリ、扨子拄杖
等ヲモテ相観スルナリ (仏性 一12オ2・上3186)

上の「観スルナリ」、更に下文の「……観セラレサルナリ」と対を
なしてをり、岩波本校異に「相、二本ニ無シ」とある。この二本と
は「弁注」と「那一宝」の本文のことで、懷奘筆本をはじめ、古写
本にはいづれも「相」がある。右二本が、これを除いたものであ
る。この場合、「相」は日本語の接頭語「あひ」と通じた用る方を
したものであらう。

(767) 装香ス (1例・自) 用2 (テ)

。手炉ハ院門ノ公界ニアリ、アラカシメ装香シテ行者ヲシテ雲堂前